

茶摘みは利用者の皆さんが 主役になれる行事なんです



特別養護老人ホーム
あかいしの郷

森紀代志 施設長(千頭)

昨年の茶摘みに私も同行したんですが、利用者の皆さんの元気な表情に本当に驚かされました。

この川根地域には「新茶ときは医者が暇になる」という言葉があります。忙しくて医者にかかれないうのではなく、みんな活気が出て元気になるから「医者に行かなくなる」ということなんです。寝たきりの人がしゃきとして起き出すと言われるくらい、この町には川根茶が根付いているんです。

この時期、新茶の美しさを目で楽しみながら、茶工場からの良い香りに刺激されながら、町の雰囲気は川根茶一色になります。町の活気を感じますね。ほかの町では決して味わえない、この地域だからこそ文化なんです。

施設利用者の皆さんにとって、茶摘みという行為は、決して特別なことではありません。一年間のリズムがお茶中心の生活を送ってきた人たちですから。

茶摘みは、利用者の皆さんが「主役」になれる行事です。皆さんが生き生きと体を動かして、自分のできることを実感して、喜びを感じてもらえる場。皆さんの生き生きとした表情を見られるのが、私たち職員にとって、何よりの喜びとなっています。



123 昨年実施した新茶まつり前の茶摘みには、大勢の施設利用者の皆さんが参加した。晴天のもと、約2時間の茶摘みを交代しながら楽しんだ。茶園のあちらこちらからは、元気な笑い声が聞こえ、中には茶摘み歌を口ずさむ人も。この場で摘んだお茶は製茶され、新茶まつりで利用者の皆さんに振る舞われた。「やっぱり新茶はうまいね」と好評だったという。

てしまうんですよ。茶畑を前にすると、みんなの目が輝くのが分かるんです。まるで競争のように、我先にと「びく」を持ち、茶畑の中に入っていく。普段は付き添いが必要とする人が、自分の足でしゃんと立って、熱心に茶摘みをしている。その横では茶摘み歌を口ずさんでいる人もいる。みんなが楽しんでる様子が伝わってくるんです。

**茶摘みする元気な姿
みんなに見せてあげたい**
正直に言うと不安もありました。日差しの下での作業は、水分補給に気を配る必要があります、熱中症の心配もあります。

昨年同行した森施設長は「僕なんかよりずっと摘むのが早い。とてもかなわないよ」と話していました。

職員がそろそろ一服しようとして投げかけると、「まだ早いよ」なんて、たしなめられることもしばしば。

「昔はね、雨降りでも朝早くからかつばを着て茶摘みに繰り出したもんだよ」なんて、しみじみ話してくれる人もいて……。つくづく、この町にはお茶が根付いているんだなあと実感するんですね。



特別養護老人ホームあかいしの郷

大嶋文枝 さん(水川) 介護士

「今年のお茶はどうかねえ」があいさつ代わりに茶摘みは、みんなの目を輝かせるんです

から。でも実際にやってみて、すぐに不安はなくなりました。みんなとても元気で生き生きとしていて、本当にやって良かったなあって思うんです。町の人たちに、その様子を見てほしいくらいですよ。時代は変わっても、川根茶に携わる「元気な姿」は、いつまでも変わらないんですね。

あいさつ代わりに茶の話
新茶時期になると施設利用者の皆さんも、私たち職員も、話題がお茶一色に染まります。「そろそろ始まるね」「今年の出来はどうかねえ」なんて会話が、それこそあいさつ代わりに聞こえてきます。そんな利用者の皆さんに、その年の新茶を味わってもらおうと、うちの茶園（大嶋園・水川）でとれた新茶を施設で振る舞うようになったんです。それがそもそもの始まり。平成17年頃のことでした。次第に、新茶シーズンの雰囲気を出すため職員有志が茶娘の衣装を着たり、踊りを練習してちやつきり節を披露するようになり、今の形の「新茶まつり」へと発展したんです。

生き生きとした姿に驚く
毎年この茶摘みには20から30人くらいの方が参加してくれます。声をかけると「私もやりたい」という人が多いですね。実際に茶摘みに出かけると、職員はみんな驚い

の多くが若い頃から茶摘みに携わってきた人たち。川根茶と共に人生を歩んできた人たちであり、言ってみれば私たちの大先輩なんです。この人たちが川根茶の伝統を受け継ぎ、努力して「今」につないでくれたからこそ、私たちが川根茶に携わっている。そういった感謝の気持ち、心のどこかにずっとあったんです。

この人たちに、何とか茶摘みをさせてあげられないかと考え、自宅の茶園を提供することを思いつきました。

昔から「この時期は医者がいらぬ」というほど、この町に根付き、町に活気をもたらし茶摘み機械が主流となりつつある現代ですが、それでも茶を摘む元気な姿は、この町の代名詞です

